富山地域文化論⑲

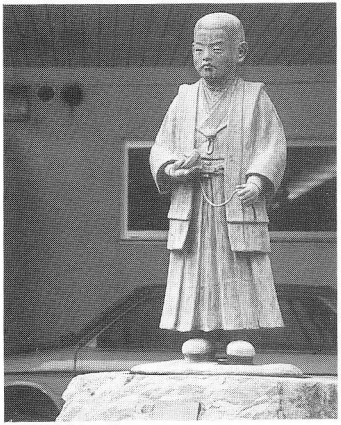
楽聖滝廉太郎を偲ぶ（前編）

植木忠夫
富山大学名誉教授

名曲「荒城の月」の作曲者滝廉太郎は、少年時代を富山で過ごしたので、ゆかりの地にぜひ銅像を建てたいと、九州人会会員の小田誠氏が、当時富山県の教育委員長の私（別府市生れ）に相談のためご来宅下さってから10年になる。「それは、たき木を背負って本を読みながら歩いている二宮尊徳少年の姿よりも現代的で、音楽文化発展のためにも大賛成、大いに協力いたしたい」と音キチの私の心はおどった。以来同氏は、作歌者土井晩翠の仙台、廉太郎少年出生地の東京、郷里大分県の竹田市や資料の多い大分市他各地へ足をはこばれて材料を集められた。そしてついに、生誕100年にちなみ、富山師範附属小学校跡地である丸の内堺捨旅館前庭で、九州人会会長西泰三氏を建設委員長とする約10名の発起人（事務局長小田誠）らによる幾度かの談合奔走により実行にこぎつけ、ようやく除幕式挙行を相成ったことは敬服の至り。銅像の原型は高岡市日本画府会員の彫塑家南部祥雲氏、鋳像は高岡鋳芸社代表堺幸山氏によって順調に仕上げられた。像の高さ約2.2メートル、常願寺川の川石を利用した台座の高さ約1.2メートルの上に建てられた。銅像は、ちょうど富山にいたころの肩ぬいあげのある筒そでの袴をはいた着物姿、「お正月」の歌にでてくるコマを手に持っている日本中唯一の廉太郎少年像である。

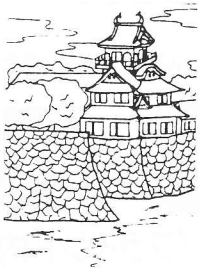
除幕式は、命日にあたる6月29日の翌30日を記念して行われ、厳かな神事のあと富大学附属小3年生橋爪治社長の孫にあたる恵子ちゃんの手で除幕され、風船打上げや、附属小学生30名による「荒城の月」の合唱、紅白のまん幕の張られた場内では列席された改井富山市長、大分県の佐久間竹田市長（代理）、林勝次富山大学学長らの祝辞が西泰三会長の式辞につづいて述べられ、滝廉太郎のめいに当る東京在住の筑紫文子さんの切々たる謝辞があった。おきよ会の会員も大勢出席して、いろいろの役割を受持っていたが、滝廉太郎と同県人であり、また東京音楽学校（現芸大）の後輩にあたる富山音楽院・大沢多美子院長が同窓生として玉串を捧げられた奇縁もゆかしかった。式後は堺捨旅館の二階大広間でなおらいが行われて祝杯が挙げられ、九州人会の日刊工業新聞富山支局長・前田和彦氏によるマンドリンクラブの演奏や舞踊が催されたが、いずれも廉太郎作曲集から選ばれたものばかりで大変よい。GL

〈5月号につづく〉



楽聖滝廉太郎を偲ぶ（後編）

植木忠夫
富山大学名誉教授



大分大学教授小長久子著「瀧廉太郎とその作品（音楽之友社発行）によれば、日本男児をはじめ春の海・春・花・箱根八里・桃太郎かちかち山・鳩ぽっぽ・雪やこんこん・お正月など40数種の作曲が盛られており、まことになつかしいメロディーばかり、わずかに23年と10ヵ月たらずの短い生涯で、よくもこんなに名高い曲を残されたものだと楽聖の偉大なあしあとを惜しまれてならない。

滝廉太郎は、明治12年8月24日、当時内務省の官吏であった滝吉弘氏の長男として出生、私が32年の出生であるから20年の先輩ということになる。神奈川小学校に入学したが、ただちに富山県附属小学校に転校して、ここで約2年の生活をしたのは父吉弘氏が富山県書記官（今の副知事）として転任したからである。富山の生活については、山岸曙光氏が総曲輪懐古館（巧玄出版社）に「荒城の月と富山城」と題して述べたものがある。とにかく父につれられ上京して後、東京音楽学校専修科研究科と進み、ピアニストとしての演奏活動をしつつ作曲し、認められて文部省留学生としてドイツライプチッヒ音楽学校に入学したが、肺病にかかり、大学病院に入院、帰国命令が発令されて帰国、一応東京へ落ち着いて「荒磯」を作曲、大分市両親の家に落着き「憾」を作曲、明治36年6月29日死去（真心正廉居士）大分市万寿寺に墓がある。「荒城の月」が「豊太閤」「箱根八里」とともに中学唱歌に採用されたのは34年ドイツへ出発の直前である。私が渡欧の際ユングフラウの登山電車の中で「荒城の月」をスイスの婦人たちと合唱して、滝廉太郎が世界的な音楽家であることを泌々と知った素晴らしい思い出がある。

楽聖廉太郎少年像は、新名所として富山市に寄贈された。